



嵐雲文集
完

中村俊定文庫
文庫 18
503



こゝにこそその説きつらうなるん
けしきふれわさるる能く
えむ一人補ふ

安永三甲午初冬

雪中菴嵐雪文集



后学 葵太選

装遊稿

是のほどを杖のし織鞋を編ておと
出たり掛羅を肩よやまの稚子を後
こゝぬを明ら満る記一帖と名ふま
とせぬをみるみ鞭をかきて獨歩此序
そのとちをり彼一帖をみるは彼の
人乃



芳躰の象しく儼しし獨身れを以て金
 貞徳二年并月上旬又父の部を出て一船の
 後之河とかけりおふしのごく細もれん
 先達母きのとて可く此指南とせんのおく
 是栢山のまをあてしといふは我ら人の
 昔菰州しく船根路を多しりちまされ
 蟻よ昔をさうめて芦石の響乃ありれを
 親と古の然とら孫よ隔らして之路の音よ

孫とるおんこのをふむけせる向よとを
 中とる百里氷花はうろさうとて河あり
 ささしよまのましくの松情ありむらりら
 ようりよさくしとて候別の向も懸家
 ときくうちやりふしとて後て死のよとつと
 たるぬせりむとまいは先路のよりなまらむひ
 孤を捨るたひひや花乃山
 とつとらり出ぬ車を推あり車をむく

あり彼も親しく是も不疎大道を門子
着有道

く不厚園苑をゆる勢あり

系とゆる甲と 勅使の場系より海をそそ
海乃も藝を掛ふも船一けよりふを晴と
はくろひ立より右の簾を祿よられらる
烏帽子の用をあらとさくくと忍由たそ
らくはいするまに富士のま井の客人哉

忍る人とは合ある縁より糸ありたり

富士を忍ぬる人もあらん花の山

大井河ちうふ海田れ富より一はきうより
拵小僧の侍りり世の中を用をまよもの
思ひよりく富のりも戸を赤明そ出歩
のち一日如舟よ徳とく富の海を伺ひ
へく豆森しそくアそ後中流くく

摩とるの遊を人より散よ杜若

と一回の篇より日れ書より櫓のりともり
をよそと舟よくと呼何方いふやゆと
すん糸文の乃者うより糸は白子川橋と
いふ所へさそ陸火の目とや——とつぬ
舟をたもの危き海路にいふ——とさそ
ゆもよもさそとよりつかうぬ舟のかる
役直よさそぬまはとも見えやとさそかん
はさそと岩の中さ——祝うれとこ四千人

ゆ糸より多くは出ぬの新庄仙臺の抜糸
を列山梨かいつのれ花作りいも——大坂の
高人あんと喜ぶう府絵の——押合より
夜ま——勝よか——らさそとぬらつのは合
ゆ——とそ船よそひ——と一時くうりをさよ
風り——きとつし程そあさ十めん帆を
くわくと地きりのやうよお——を舟ハ茶
うさよぬえ横雨骨を志ゆるかくてはい

侍らんして海山を見上げさかしく船を
ふせりやと伴勢の陣中よと尾法よと
志ろくせむ代友なり志の侍とて家く
りり終一里斗の丸志はよく人象百軒斗
あやいうは海濱めさたれと漢家み入と
うのうおあやの老婆いと深切よ強ハ憂
そのよこそ侍る娘も去年のころ白子の渡
海より役船しと西風をうち侍りしよ

かふるを海邊小舟をとも大熊の恵このゆきを
あふよとそくそく是侍りりり海は風信ハハ文よ
似たりとうや伴勢の志の侍ハ尾法よと前の
後身や侍るまよよ二目を経てぬけ糸のつと
うらよ糖を求きたらけ合ぬあついの風侍
ゆめりとしそ我さねよ争ひ糸てあつと志
陣立思を思うけあふよ又西風つとく出て
揮らりあせんと南よりのめ山よとて神時

とろく〜と海底みち〜き名の船々〜れ立て
いふむらり蟹よもえ流くたよたよまよたよ
らめく船中表のまよ〜と母只磁石を役り
いせの方を祈そ〜りそ志〜〜くれ人〜乃
命ちりりりまは時生涯の浮め〜るりま思ま
人〜れ首ようけれよ色め〜るり称ら身を沈
むるよ〜り〜あ〜〜板子一枚よ〜り
危角〜〜り〜の〜〜ん〜え〜〜る〜は〜出〜て〜あ〜る

ゆ〜め〜と〜そ〜あ〜を〜役よ〜ま〜る〜り〜こ〜流〜あ〜そ
侍りけ〜は〜流〜た〜れ〜を〜吹〜を〜あ〜ま〜そ〜を〜流〜し
出〜〜〜を〜津〜粒の音〜流〜され〜侍〜む〜ん〜こ〜ま
ん〜を〜の〜を〜命〜り〜と〜そ〜氷〜ま〜も〜流〜こ〜む
ま〜ひ〜大〜粒〜を〜り〜く〜と〜お〜〜の〜む〜沖〜よ〜た〜
よ〜ふ〜り〜ま〜日〜半〜た〜り〜を〜考〜る〜よ〜よ〜十〜里〜も〜侍
らん〜り〜の〜漸〜を〜志〜の〜ま〜り〜と〜岩〜是〜出〜こ〜り
鷹〜神〜の〜を〜身〜と〜と〜を〜成〜爲〜の〜中〜に〜あ〜る

ふめりしと遠くをわたり古具足

加茂の足掛と神人浄衣よこしぬきし
物れ何しをたぬきし帳の屋よるくさねを
さしめ赤くしきくをりてくるくちやと唯
ま白くくると見えぬの次

落しはうことよ目立や何掛

又日のくくるとて赤みくくしひ芝生し碑を
りふれ名跡も言うくまきり

あやめ草加茂此うり橋今幾日

十五日と今交殿七日よりお猿馬此出之
當日小川を南一神樂を演しなる十八日
まきく秋交りし清川

埋火を原と何かく秋のぬ

一様賞覧しとく皆川中よ海しりり侍を
味暗措りし涼を鯉の遊り神

伏見山々

ゆきくのかきよ伏見や夏の月

炬松ふゆく時色をけも夏りの古風
なごく——

ゆきかて来る夜送る秋の月夜

祇園會此七日の許十四日此山後より綿を
見よのちるハ秋夜い——松尾の門む
素袍よた刀をもこく口糸言余の過は麻几を
長と下の紐をむち——さゆめてくはあおの

房さけある換持久い——かちんの下下
くろ男等思深の持よこめ持て様をつ
ろい非常をい——むゑく定られを
一二の圖を改うへそ威儀厳重なる中み階
ふと白と車よつこく町こくに引を何れ
用よりゆりしむ

ちて白もともみ踊や祇園の會
か——れ涼し

来るもみれゆく水澄ふ涼のふ

子本を南一四塚のふらりく行とて

鴻原のふも深々と藍とてけ

系より唐崎一活とて志賀北山越はら

るりたる

志賀越とありし被や菊のふ

七夕

七夕や加茂川より流牛車

花を井難波屋の蹴鞠池の傍の立花初乃
田まいかりれ風流とて入るあまみそと
阿ら

秋風のうららむをのそく立花

九日の六石系小舟の管れ冥途よかふる

ありとて活中のま織とて松のふり

めく魂をむらさきとてとて

あま言くおとまりつて速産

おとよの愛よを盡せむくはちさりのつら
き一途く京一くといひける程は四臨終
見るといひてはま向くさふりとおひひを
もつらなり彼はちそひとの果なる二十
年来み——その名よをのれう罪せんけ
しうちけさうらふくとおおまはる人よ見え
させて公衆といふそのをむ祿くりり侍らふ
首ありらん人よ名のあふむらうの味はる

いふをいも困次回来たうと身をあらたて
空しく進と暮らしていふ——き難くそ程
祿くりりとの尾よあふき重きうすく止
さうけとて文戒せう勢て若山浄白と改名
志す路らるくと成ぬ愛よを食——かこよ
け締せんもんやう——とて悦あへる唐室も
別み志のらひらん——とてさうのとなく用
ませ——よ病せもよきめて甚本まさうりハ

うけに終まりうふま何とぬくおりのひや
ききやうりきやうあつふまの涙やこ
心の魂むくく

魂祭ここの祓ひの都あり

十六日ハ山の送り大如意嶽の大文字松
崎の妙法河原も麻くも大なる
魂むくく——侍りぬ

燈を焼大のるや秋の風

大文字の匂をりてめたるも若れんの出る
中よ

山の燈を若も月を大文字

里右の娘くく——あひらきよはくく

鬼灯のさすきよはくく

神のまきり系

暖湯中の淋くくく

いこくく神をむくく其日をくく乃

あすこよ鹿をさきて二軒之夜とめと都の
家此棟もあまのかそくぬ

洛外の过堂いらん秋の風

返唐

被ふ月をささるよゆり秋の風

海雲の方丈一の脚のいと波中入る時途
中文用此一句を同じ随々言中りいん子
半爰ともかへら次と名跡とてまてま去乃

秋歸新々

種子森るる年の思ふ秋の月

師問云去春望別送乙片語今秋归来
相見了也即今如何是行脚眼某答云
觀音境裡古窠樹師云窠無古今色
作麼生無古今色的一句某進云春色
無高下花枝自短長師領之休去某
并退參堂去

塔澤記

山野にかけり温泉ありて川に氣血成
 居しありて三思のほと浄光禪院あり
 日毎に於小寺の彫を斜に流るる東山の
 ありてた右より峰かけり蒼天に成見
 越は士輩逆舟初より是より松蔭に湛深
 川の流指を流るる如き玉をすらるるをすて
 心を補ひ眼をいさへしむるの温泉を

弁佳境に助ふありとのとと大う
 ありて心を信作するき其場なり書ハ早雲
 瑞巖和尚の述作ありて紙上龍蛇を飛さる
 友を塔の決と中侍より阿育王八百四十年に
 宝塔を作りて滅後の佛舍利を託せり
 曰天中のみ分布し終ひあること世日のり
 心ある七ヶ所ありていひと川にそそ塔に
 蘇より十八町の嶮坦を定りて厚茅草乃

一字此法堂なり河育王山といふ阿弥陀
寺の四字ハ支那南源老師の筆跡中無因
基草抄上人と字一ト推化此人なりト云
龍居多ひト云名窟の跡を推考するに可
斗山上ト云推考も無ひト云此所祖トあり
ありとのト云なり居て終其人るト云ト云
迂化ありト云ト云漸人の根氣もおとれ
行くと今ハ菴も山のす後み吹おろされたり

近き家と云ふなり密易行無ふト云ト云
又東の法といふなり此ト云世江城より北湯石
けト云塔此字少何様ありて東の字ト云
らト云ト云後東塔通用ト云ト云東よりト云
彼阿弥陀寺ト云遠登りて院中ト云ト云大なる
用意ト云ト云柱ト云ト云いとも入お後ト云ト云
ト云ト云ト云ト云ト云ト云ト云ト云ト云ト云
ト云ト云ト云ト云ト云ト云ト云ト云ト云ト云

燕北かつりる河り洞れる

け湯の世とみむる水りり川り又六十年
前寛永此比お流く字一初りるを里北入
りよ熊神権現の小社あり性首より地一途
ましくりる其ましめを知人かし一苗所
風祭の田支彼地の采をとりぬ院宣しり系現
さ流くたしりけるこのまは怪しきおま
ゆりえそ名湯ありと告まをりり一人

いぢり信用さしりもたき年ありて小田系より
一家をうりし居候しりりさしと穂穂乃
おそ色多く女とさるその誘振さやうしよ
隣を並ぬ今此一の湯小川系五村用の湯これ之
追日うりやと集るそのみよ家取謂上湯之湯
背平の湯院の湯かすし此ゆき之玉れ流乃
流の湯ハを年かうれ出さうりしそ中結未
洋中無流民の大守福系の流家人水成氏

何素子足不仁の熱ありて湯より来りて
叔をとりて神女十二人の客僧出向く答
されしはう病も取れし金湫の茶師十二神の
擁護ありて法病悉除け誓むありて
冥誕ありてとて楸中一云書しとて赤飯二玉 破酒
二種をよせとてふりて其時此健世一者
今此宗益あり存命ありて九十有餘穢極
ちかへし健水て大力を此翁ありての系仙

神の不思議ありありとてむりてあり
まうちとてひまはかむむ一剎に山路も
さし道夜も深つく梓の葉も伝源を尋ぬ
程石よ志ふ杖をぬる藤うね
河原も出く二百十日の波ありおとらふ貝吹
あらしを枯小屋も目なきぬらう心ありぬ
水音も絶さひありて山里を
堂う瀧文の下の庵倉木香茅の湯を流す

地獄早りとつゝるなり沸湯藍のぬくもを
練瓦地くくといひ鉄槌の音するを無治屋ち
あくといふ寛く山陰に鬼窟地獄をよぬも
巨ちりや梢免て苔の糸りえ堀こくこく
盤石粒一むらんく佛名をこま男のこぬ
顔まをこくといふくけは想くといふの濕化
蝶蜻の顔雲をぬりたるこのこく
己くく俄鬼のぬくはまきりくを

湯本子雲寺ハ小田原山桑又代の善松取く
古墓のつはくくくと並く子え祖新九郎
氏發ハ永正十六うれく八月十五日
逝去有くとうや今早雲寺殿瑞公大居
本く苔を削のあら名を好む

子雲寺名存れまをぬりく

宗祇の廟

石塔を捨てまやすむ一系卦

長興山の麓見よまきつりて梅花径を下り
白雲園を以て喜蛇白を泉此奇石の石を流ハ
之節子落りり流のりを川漕と号く水の
流を心潭とよみ泉此砌よ多たなく程此
流江阿りかいらを付さううひも流母
小田原の海と云ふ山は成る東海此山此
のよとよ高なる山いとあやしく流るた
せし流むつれれくよ新派と云わひてか
る

取ら結ると字ぬえ流る此泉系につくそ
世射白を一之回の日流くもく取ら流る
あまぬを親しと流るりて流送一山
石くも流るりり見くも小田原より流る
見とけととまきりりたり

神流小とつりり一と云や流る
こと一も名月ハ徳念大仏より見る
明月を南を流るり此頂珠

胡塞記

蜀山身冷し姑蘇竹臺孤松空しく老ぬ
高田城壁を傷かむ此筋の岩橋の夢路
かんとるしつゝの啼めりて面をりし海
うほちの殿造りしつゝのさるは園庭をりし水
乱れ咲く草のまじりしつゝのや故郷をけりし
かゝるしつゝの拓くともある人ありし
一本落るのりつゝの流る恨むはうゝの菊

墨灯とつゝの葉れ一房極細せしつゝの葉れ
上篇れ短くしつゝの喜やむくしつゝの南窓み
有あつりけしつゝの窓色をりつゝの鏡もあつ
次白雲を舞はれしつゝの粉は志ありしつゝのち
時句は流るしつゝの板戸れ細くしつゝの其人の号
あつりつゝの菊れいらくしつゝの

後の菊もをりしつゝの縁は花の葉なり

新山里れ葉をりしつゝの面白や橋をりしつゝ

半くちく霜斜に雪り茶店ハ年くの雪よ
かこふふ破道主層埃拂ひもも葉落るや
ゆぬをの月うら瓶うらほり此樹とありま
胡椒を碎く鳥の嘴梨を碎村鳥れ声響
凶宅の隙うはさばそかかーうりけふ

風より梢に梢は如乃うりうれ

風樓よ雪山をえ道とをま山画扇状
ふとくすきとも丹まいうくの縁あり

源沈よ菱葉をうられも採蓮の浦ゆわの
なる幸もあけとを泥飛舟をみこり
彩をいとよ絶り

蓮の骨表古男女乃尸うね

百士ちりまに屋形隣境を分ち蓋れ糸
薄れ巻と来ぬととて家魁軒燈を忘れ
まあさ大勢ひつり道行人此福を去るよ
まへくくんるりの空を心と川とく後

あゝはるるあゝ一年うのり時愛
しき跡生山着う山代水もえのころを
汲志るありいり里て玉苗や稲系此時後と
うやけ西志ろしめを及る記み定りぬ氏ら
君君れ徳而ふめくし肆履のをくし我の
志く貪村あゝひ電を及ら加り里を
埋木の死よあそひぬより後の身よ唄く
神大和れ風俗詞多種さくは信せりあ笑

美妻と胡ふり楓路りぬ

吾ら去る年の若菜をこや一橋小あゝぬ
梢まゝ春れ交を榮ふ坂原も花の道た盤
山平そ見捨る东路や上野の花乃言吹ハを
く〜次目見吾中の道橋を〜とや侍らん
とわいふ心よたをんをうる中もあはせん
るあゝぬ朝か二月下旬秋後を他の〜ら
〜と詠はるぬ

乳をとる辨

志くは此乳をいふも襟のふとくさくし
ほるこの飯粒の半しは相はすりあてり
疼く教しをちも眼鏡二まよるく渠を
杖竅ひんるみ白く肉悪き腸呼吸ふつと
初揺く眼きくくくとんすえもく宮く六ッ
ありそおそろしけあるう後摩堂よは
まると明玉るよ似たり虎もたぐひ新とを

卒くし誠や必死の人此床みくひあり
度くあさむきふくむくあそ本草よんえ
たさいささ死すしきふや屍くむけてゆく
おそろしとくねをあそさもえゆれ己の
姿れをくこれ虫かきくする物ハ唄定ふ
たぬハ声のふけとをたり今がし角う後
かくを待着れあすすひも志うみやハさく
義虫りやうりたる冠のみちとハ新世か

うしと果らさくは業生此不ところそ拙り
 臭穢の中其質を稟て禪に滞り縫目り
 かるさく人の血氣を祀り吸く故に此疾
 半を嚙りり程まき生滯乃終まる所ハ
 火より此中細文烟とさひ本粒の角り
 切りし恥をさくさく此はぬさくを去如乃
 性のはるるや摩羯をうくういふ魚の
 大百中旬より棋腹の微細をうくくゆき

こころを悟るる中をうくくそそそ
 内裏よその化初なるにその点灯の光よ
 一をさくく拾りてはみその化のり流り
 けりしそ知識の肌よ訓すくひて徒を同
 いそれりもさくき因縁ふや柱の定よ生体
 ちくく旧年の然人其の執りともさく
 いうみあうてんとかふをぬくを捨り
 志くくまきいそち思ふるよまろくそ

志海けて忍ぶるにこはりしはつらと強て
あふらるる東ととかし一測は拙居せし人の
顔しそふ歩をこきりてふり愛も志しそふ
あつこ志のつめれ空を志しそふをぬ白力
坊う衣被しそふのう

葬れ死すしは然らるひふか

若菜の序 祖翁一回忌集也

きのうや義伸寺に葬祭るや和十月十二日

なよありかしとよなりしあはれ候ハ暇よとる
余情を筆み述ぶ法を今覚る人のおひ
出草あるしはくさ嘆ふほふ秋のいほく
むしのみをれ身よをぬうつりけりよと終よ
こうししはくしそふをく白くまをりし
を心の苗種門人具道いう形る是御徳の
主人公

戒時序

花より對して信あらんを死う〜とあ〜ん
白く是母智ふ也〜花母回をむ〜は
事あり姿い〜水よ志〜う〜とある
ときを〜也

児筆序

冬松ハハ川も星加ちよ東あう起〜と隣を
痛せに旭うす多新今やと待〜魯山乃
凡中よ指は〜志〜百里のを此父よ〜と

唯親も親あ〜と〜思〜ん〜子母も
待顔なり

筆〜侍ハ初中不〜と思橋

右の児よ概筆させ〜母もよ〜。門人
大魚因半法若ハ匠免因光潮待役の一兵
あり付れよ〜と〜と

其袋序

あみく道〜と〜天の袋ありあ〜ゆるさう

入おなり人よあやくらとり母の糸なり
等らうにわかんはとく父よ追まて怖しき
くくく袋のかくきめんーもいつよ日すれて
産かー袋れにもむきとんたそありきこれよ
たる嘘袋ハ清補の名に川ぶよあ〜あ
我そつごありきぬ我きみ書袋よ有職
火袋のり首よ懸ふはやくらよわいふあ物と
入らりそ付の袋とくや春山そる有も季かえり

囊よありー一糸の袋ハ乞乞の心さすり
袋そきもや〜おもうりけむ為憲々袋紙
か〜むとまをこえ懸く〜そりてむつー
まよ其ふ〜らや花の志何〜は身の内
あ〜ね〜指ひく〜とあ川めて我家此秘蔵
あ〜後〜とき葉よもきせに猫もか〜と
元禄三年かの〜年此あ〜月嵐雪〜川
く〜と序

吊辭

いつれ冬この風のうららむさそめ昔の葉の
おりてるうらら林うららまよこころり杖よさめ
のさしり移りて小義と病つる乃浮世を縁取よ
あしと枯れよあそふと笑えうひー一を
そふのうらら母あしぬ其角うららはちきり
あそやけおれ對面後の中を納法久
かりを此境の人とまいたまひり及さるや

江都母うららうららせる能くまことく
席をかきうらら追昔興りれうらら神は後小
心あひうららぬて能く安を忘る家士もんは
大井も志ぬをうららあそふ七自を
あそはくよのほら義仲寺の塚よら
あそく空花散り水月うららほら
心鏡一葉をむららさそそ可象よく物る世師
この及りけうらら自を利り他を利て終る

黒茶碗銘

黒茶碗あり花の且とすすく馬く言の夕と
いよく運一月待青れ暗をさく正園起鼻を
とくはくハをあつちめくはくしるをあはし

檢校 貧僧 大黒 小くら 鉢の子 子子子 小まむ

三代めをのん事りりみのんまそ程ふまを味
阿ま秘しそ志をくく鉢と

松平れりんまいそは馬茶碗



